



—創ろういいまち勝山町—

岡山県郷土文化財団 クラシックコンサート

出演 倉敷管弦楽団

指揮 菊地 東

日時 昭和**63**年**10**月**30**日 (日)
午後**1**時**30**分開場 **2**時**00**分開演

会場 勝山スポーツ文化センター

主催 岡山県郷土文化財団・勝山町
勝山町教育委員会・勝山町文化協会

後援 燃えろ岡山県民運動をすすめる真庭の会

曲 目

I ベートーヴェン

「エグモント」序曲 作品84

II ショパン

ピアノ協奏曲第1番ホ短調 作品11

———休憩(15分)———

III ベートーヴェン

交響曲第2番二長調 作品36

曲 目 解 説

●ベートーヴェン作曲(1770~1827) 「エグモント」序曲 作品84

文豪ゲーテの戯曲「エグモント」が、1810年にウィーンのヴルグ劇場で上演されるにあたり、付随音楽としてベートーヴェンが劇場支配人から依頼を受けて作曲した曲です。

この戯曲のためにベートーヴェンは、序曲の他、4つの間奏曲や歌曲などを作曲しましたが、中でも序曲は、古今の最も優れた劇的序曲とされています。

劇のあらましは、「16世紀にオランダがスペイン国王の圧政に苦しんでいた頃、オランダの貴族エグモント伯爵が祖国の自由独立を目指してスペインに反抗して捕らえられ、死刑の宣告を受ける。彼の愛人クレールヒェンはエグモントを救出しようとしたが果たせず自殺。自ら自由の女神となってエグモントの夢枕に現れ、彼を勇気づけ、従容として死につかせる」という物語。

●ショパン作曲(1810~1849) ピアノ協奏曲第1番ホ短調 作品11

ポーランドに生まれたショパンが、19歳から20歳という若い頃、自分で演奏する目的で作曲した曲です。

ショパンはピアノ協奏曲を2曲作曲しましたが、第1番の方が年代的には後で作曲されたもので、ショパンが再び帰ることのなかった祖国ポーランドを去る直前に作曲した青春の音楽で、みずみずしい感情をたたえた名作として広く親しまれています。

●ベートーヴェン作曲(1770~1827) 交響曲第2番二長調 作品36

ベートーヴェンが作曲した9つの交響曲は、いずれも人間的な感情や思想を盛り込み、激しい生命感を聞く人に訴えかける迫力をもった名曲ばかりです。

1802年、ベートーヴェンの耳の病がますますひどくなり、その上腸の病気にも悩まされ、医師の奨めでハイリゲンシュタットに転地しましたが、自らの生涯に絶望し、この年の10月6日付けで、切々たる「ハイリゲンシュタットの遺書」を書くのですが、このような生涯で最も痛ましい時期を乗り越えた後、この明るく喜ばしい交響曲が生まれました。

交響曲第3番「英雄」や第5番「運命」といった巨大な交響曲とは趣を異にした、美しく愛の喜びさえ感じさせる魅力にあふれた曲です。

勝山町歌

作詞 山本孝之
補作詞 浪本澤一
作曲 加納光記

一、ひかりあふれる山なみに

せせらぎ清い旭川

そよ吹く風にさそわれて

もくせいの花咲き香る

ああわれら愛する勝山よ

夢と希望に伸びる町

二、萌える緑のさわやかに

杉や檜の美しさ

心と心触れあって

きょうも明るくはずむ声

ああわれら愛する勝山よ

夢と希望に伸びる町

三、青空高く雲白く

滝のしぶきにかかる虹

豊かな自然に恵まれて

働く汗に歌が湧く

ああわれら愛する勝山よ

夢と希望に伸びる町

四、長い歴史と伝統を

守りつちかう心意気

若い命のはつらつと

明日にはばたくたのもしさ

ああわれら愛する勝山よ

夢と希望に伸びる町